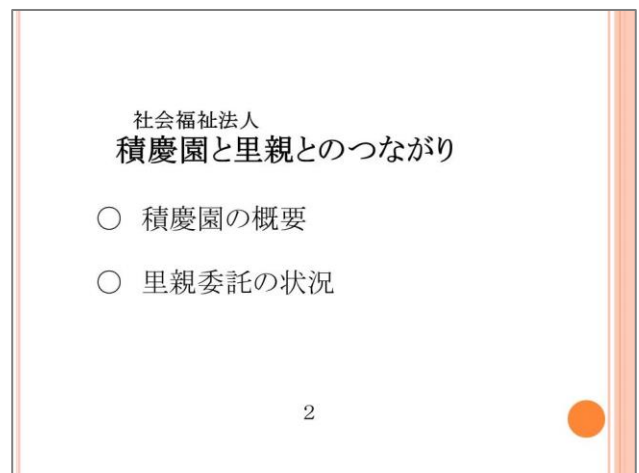


里親支援機関の受託をしたのが平成23年の10月ですので、ちょうど丸2年経ちました。2年間の間にどんなことをしてきたかということですが、京都市の場合は委託率が全国で下から数えて何番目みたい状態で、依然そうなんですけれども、古い土地柄ということもあり、里親委託がなかなか難しい土地柄だと感じたところで受託をしました。実際どんなふうにしていったのか全く3者共が手探りというところでしたので、協力体制がよくできたなというふうに思っています。よく名簿とか情報がもらえないというようなお話を聞くんですけれども、そういう点についても、児童相談所と共有するという面においてはよくできているなど、いつも感謝しています。

先ほどの前橋先生のお話の中にもありましたように、京都市の場合も児童養護施設がたくさんありまして、今はもう定員割れをしているところが多いような状況の中で、じゃあ「どうやって里親委託を進めていくの」という話しになるわけです。社会的養護を実際に担っている人たちのプロフェッショナルがたくさんいるということですので、その人たちの力をどんなふうに活用していくかを考えて、「本当に子どものためにどこが一番良いかということと一緒に考えましょう」と進めています。その施設でも職員でさえも里親委託をまだまだ考えていない状況でもありました。実際積慶園でも創設以来、ずっと脈々として里親委託はあつ

たんですけれども、それは遺棄児や、両親が亡くなってしまったりであるとか、やむを得ず養子縁組にというケースで、養育里親というのはたぶんあまり聞いたことがないなというふうに思います。たまたま出てきたケースを里親さんに児童相談所が手配をして委託をして、じゃあそこをきちんとケアができたかという、そこはなかなか難しく、不調になって、帰ってきて、結構辛い思いをしてる子どもたちの姿もみてきましたので、「あのときにこの支援機関があったらこんなことにはならなかったかな」とかいうふうに思うこともありました。



積慶園は、乳児院と児童養護施設の併設の施設です。養護施設の方は定員60名と、小規模ホームが1つあります。乳児院は23名定員で、一時保護の子どもたちがすごく多く、3分の1くらいは一時保護だったりする時期もあります。ほぼいつも23人満員な状態です。

サポートセンター、支援機関の取り組みですけれども、人員構成は、里親専門相談員が2名、家庭支援専門相談員が1名、心理士が3名、スーパーバイザーとして神戸大学の川崎先生という人員構成です「青い鳥」支援機関の取り組みですけれども、出前講座をやっています。

サポートセンターの始まりは、里親を知らない人の方が多いかもしれないというような状況の中で、まず知っていただくということが大事という

ふうに思いました。それも知っていただくのも里親に関心のある方ということだけではなくて、広くいろんな方に知っていただいて、その中から里親になっていただく、そして応援団になっていただく。ということで、いろんな方に知っていただきたいということで始めました。それではまず民生委員さんとかは、虐待とかそういう地域の子育てとかいうことにも深く関心を持ってらっしゃる方達なので、手始めは、民生委員さんのところからでした。ただ、学区が100、200近くもある中をコツコツと回っていてはとても行き着かないので、なんとかならないかということを行行政の方に相談しましたら、「それを上から言うと、なんか借りができるかもしれへんし、そこはちょっと難しい」みたいなことを言われました。じゃあコツコツやるより仕方がないなということで始めたんです。けれども、やっぱり里親支援機関として動いているというのを行政の方も、推進委員会の中でも話してくださり、きちんとシステムとしてそれをやっていかなければいけないということも思ってくれるようになりました。こちらからアポを取っていくより、民生委員さんの研修の一環として取り入れていただく形になっていくかなと期待しています。

それと一般市民の方はもちろんですけども、児童相談所の方がどれだけ里親委託の認識を持っているかということも、ずいぶんとクエスチョンマークがつくというところもありまして、施設の方、「ぜひこの子を週末里親に出したいんです」とか、「養育里親さんになんとかありませんかね」とか言われたときに、「それなんですか」という返事が返ってきたということをいくつか聞いておりますし、京都市も全員が専門職採用されているわけではないですので、全く違う部署から来られている方があったりとか、その新しい方がその電話を受けたら、「里親についてはわからへん」となるかと思えます。私たちが児童相談所のケースワーカーに研修をするなんておこがましいとか

すごく思っていましたし、なかなか自分達の方からそこなんとかして下さいとか言えませんでした。同じ里親の仕事をしている、いつも一緒にしている方にはそれを口に出しては言っていたんですけども、他の方達にはなかなか言えないことです。でも里親担当の方達もこれはぜひケースワーカーにも知っていただかないことには、子どもを措置する時にケースワーカー自身が里親委託を考えないことには進まないだろうということで、児童相談所の方にも研修をさせていただく時間をとっていただいています。それから1年近く、1年、半年以上経ってるんですけども、やっぱり新しい子どもがきたときに、この子をどうするか、里親委託という選択肢を一応は口にされるようになってきたことを聞いてますので、一歩は進んだかなというところなんですけども…。一方で、実際子どもたちを預かっている職員が、この子ほんとにこの場所でいいんだろうかって思えるかということもすごく大切なことと思いますし、どこの施設もそうだと思うんですけども、両親がいないという子どもは少ないですし、精神疾患であろうと知的障害であろうと、やっぱり親は親としての思いをしっかりとってらっしゃる。ただ、だからといってその子が将来自立をしたときに、家庭モデルができるかということ、その家に帰ったとしても難しいところがあります。週末里親をということは考えられないだろうかと、今年度は、全部の京都市内にある全部の施設に研修に行きましようという計画を立てました。全部の施設順番に、施設長さんにお話しをして、実はこういう趣旨で話をさせていただきたいとお願いします。応援団になっていただくということ、それから委託をする人たちが意識を持つということ、今里親になれる人への研修というところ、それから児童民生委員さんへの研修をいたしました。今年度中には全部の施設で里親についての研修をさせてもらうことになってますし、ただ京都市の場合は委託をする子もなかなか

難しくて少ないんですけども、受けて下さる里親さんが圧倒的に少ない。特に養育里親さんは本当に少ないというところがあります。今すぐ里親さんになってくださる方達に向けての研修というのもしていかなければならないなという風に思っているんですけど、まだそこまで踏み出せていないので、早急にそこもしていきたいなというふうに思っています。それと将来的にそういう立場になるであろう人たちについても、里親制度というのをしっかり知っていただくのも必要だということで、ぜひ学生さんへの出前講座もしたいということで少しずつ取りかかっています。大学のゼミ

私たちからも伝えて、システムは少しずつできるかなというふうに思っています。

新規里親の調査訪問ですけども、こちらの方は、受託をしてからはすべて児相と同行して調査訪問しています。推進委員会の事務局も、支援機関の方で受託しています。推進員にもなっていますので、推進委員会の方にも出席して、今のところ半年に一回ですので、そこで問題点等を伝えて、この先どうしていきたいという意見も申し上げておおかたの評価としては、京都市の推進委員会は、形骸化ではなく、ある程度機能しながら進んでるなというふうに思っています。

#### 支援機関(青い鳥)としての取り組み

- 広報啓発・出前講座
- マッチング
- 里親支援
- 新規里親調査訪問
- 委託推進委員会事務局
- 里親支援専門相談員との連携
- 児相との協議会
- 機関誌の発行

3

なんかで取り上げて下さる先生もありますので、そういうところに行って、お話しをさせていただいています。

マッチングですけども、発足した頃は「児童相談所が行きました」みたいな報告しかなくて、すでにだいぶ経ってるやんみたいなことがあったりしたんです。最近では時間、急遽一時保護から急遽委託ということでなければ、事前に相談いただけるようになってますし、マッチングの方も一緒にさせていただけるようになってます。こちらの方も、ほんとに当初からそこに関わっていくということで、その後の支援がずいぶん違ってくると思います。中途から関わるの難しさは、これまでずいぶんと味わってきましたし、最初出会ったときに、この委託には支援がついてますということ、ちゃんと児童相談所からも伝えていただいて、

#### 里親支援専門相談員との連携

京都市は今年度から乳児院積慶園と、児童養護施設積慶園と、それから児童養護施設聖嬰会、それから児童養護施設平安徳義会、この4カ所に専門相談員の方が配置されました。5月の初めに顔合わせをして、その月から里親専門相談員の方の連絡会を立ち上げて、そのなかに支援機関も一員として参加し、毎月連絡会をやっています。実際にその月の活動報告であるとか、ケースについて難しいものがそこで出てきたりであるとか、この先自分たちがどんなふうに活動していったらいいかということ、かなり皆さん熱心にお話しされていますので、来年度からはあと3カ所すでに配置が決まってまして、もう配置される方も決まるところもあるので、その方たちも一緒に連絡会の中でお話しをされています。私が支援機関をさせていただいて、相談員の方が各施設に配属されると聞いたときは飛び上がるほど喜んだんですけども、一つの支援機関で京都市全部を把握していくとか、そこを全部動いていくのは、なかなか難しいものもあります。割と京都市内点々と散らばってるというのがありますし、その地域のことはその支援相談員さんが中心になってやってくださるということであれば、そこをまたみんなで共有していくということをするれば、十分と力になるというふ

うに思いましたので、今後相談員の方の連絡会とも協力しながら、進めていきたいなと思っています。そのなかで里親委託というものが、確固たるものになるというのが将来的には理想だなというふうに思っています。

児相との連絡会ですけれども、こちらの方は日常の連絡であるとか、連携であるとかは先ほどもお伝えしましたように、「ああこちょっと不足やし、こちょっと不満やし」というところはほとんどなくて、まあ私があまりわかってないというところもあると思うんですけれども、こちらが意図したことであるとか、そういうことは伝えればちゃんと答えていただける。できないことはできない、できることはできるということなんですけれども、連携はうまくいってるかなというふうに思いますので、不定期ではあるんですけれども、協議会の方は行っています。それから機関誌の発行はこれはさきほど皆さんに配っていただいたも

### 青い鳥の里親支援

- 相談窓口の開設
- 家庭訪問
- 心理面接
- 里親サロン  
(フリーサロン、テーマ別サロン)
- 研修 (里親会との共催研修)  
(里親と施設職員の研修交流会)
- 学識経験者によるSV

4

のです。

あと里親への支援というところですけど、ここに書かせていただいていますけれども、大事な項目として、家庭訪問をあげています。傾聴するということが大切というふうに、いろんなところで言われていますし、私たちもそうだと思うんですけれども、行って、「そうですね、そうですね」と言うだけでは、支援機関として、支援のプロとしてそこはもう一歩進めなければいけないというところがありますので、ほんとお話を聞きながら、

共に成長を喜びながら、その中から次につながるものであってほしい。この人がなにか不安に思っていることであるとか、その先どうしたらいいんであるというふうな不安に思っていることをきちんとキャッチできる力というのは持っていないといけないなというふうに思っていますので、にこにこ笑いながらお話を聞きながら、頭のどこかではしっかりと観察をしてというところで心がけながらやっています。幸いにしてここまで里親さんのトラブルというのは全くなくて、最初のうちはほんとに「何しにきたの？」みたいな表情で迎えていただいていたので、ちょっと辛いなと思うこともあったんですけれども、中に入ってお話して帰るときには、ほんとにずっと外まで送ってくださるというような状況になってきてますし、今は待つて下さるということが、大半の方が待つて下さるので、その中から次につながるものを見つかりと見ていきたいなというふうに思っています。

里親サロンですけれども、こちらの方にテーマ別サロンというのを入れているんですけれども、「サロン開けてます。どうぞ来て下さい」と言っただけではなかなか来てくださらなくて、じゃあ少しづつテーマを決めてやりましょうということで、幼児さん対象であるとか、それから乳児さん対象であるとか、あと親族里親でおばあちゃまたちが育ててらっしゃるという方も、ほんとに難しいケースの孫を育ててらっしゃるというケースもありますので、ばあばの会というのもやっています。それと今年の4月から中高生の子を養育里親さんに委託をしたというケースが3ケース。小学生が2人で、全部でかなり大きい子たちを5人委託をしまして、特にその中高生の子の場合は、施設内での性的虐待であるとか、その加害者であるとか、それから家庭での性虐待であるとか、親子の関係が難しく、とてもじゃないけど一緒に暮らせない子であるとか、施設に入ったとしても難しいケースの方たちを、その中の一人の方は、初めての養育里親という方に委託をしまして、じゃあこれど

うしたらいいんだろうということになったんです。絶対に里親だけではできないし、児童相談所だけでもできないし、支援機関と里親さんだけでもやっていけないだろうということを考えまして、まず1回目はサロンと称して集まっていたいて、スーパーバイザーの先生と一緒に話をさせていただくなかで、今後起こってくるだろう問題であるとか、里親さんの思いとかを聞いていただくというサロンをしています。

### 今後の取り組みと課題

- チームでの里親支援の具体化
- 里親支援専門相談員との連携
- 広報啓発・出前講座の効果的な実施
- 児童相談所との連携・協働と役割分担
- 養育里親の育成と支援する側のスキルアップ

5

それでこのチームでの里親支援というのに繋がっていくんですけども、今回養育里親に委託したケースについては、ぜひ不調にならないで、無事に学校を卒業して、自立をしていただくというところを目指したいなということを、児相とも話をしていまして、それをすることで、里親さんにも自信がつくと思いますし、また次のケースを、中途養育をお願いするということも可能になってくると思いますので、そのためにはぜひ里親さんも支援をする一人であるという認識を持っていただいて、そこへ学校であるとか、私たち支援機関であるとか、児童相談所であるとか、いろんな人たちがチームになって、その子どもを支援するというスタンスでやっていきたいなというふうに思っています。

児童相談所の担当の方が頑張ってやって下さってる方だったので、最初は「うちがこんだけやってるし」みたいなところをちょっと姿勢を見せられたこともあったんですけども、いろいろお話

しをしている中で、みんなでやっていきたいと思いますというようなスタンスを持っていただけるようになってきたなというふうに思っていますので、この難しいケースを、ぜひ高校卒業するまで、支援していきたい。チームでの支援ということがすごく大事ななというふうに思っていますので、児童相談所の方にもそのことを再三投げかけてますし、推進委員会の中でも声に出して言わせていただいているということで、里親さんに全部丸投げしてしまうということではなくて、里親さんも子どもを支援する一人だというスタンスを持っていただけるように働きかけていきたいなというふうに思っています。もちろん家庭ですので、その親子の関係というのがすごく大事なことだと思いますけれども、一方で里親さんが「うちに預かった子やから、うちが何が何でも頑張らないといけない」みたいなことを思わなくても済むような関わり方ができればと思っています。

最後、私たちが考えている望ましい里親支援とはというところで、里親さんが、「本当に私里親やってよかったわ」って思えるような寄り添い方や里親支援、丸投げでなくて、チームで養育ということをやっていければと思っています。

この支援機関ができるまでは児童相談所のほうも、施設がたくさんあるということもありますし、「里親さんに預けると、すごい大変なんだよね」ということをおっしゃってますし、最近は「大丈夫です。後は任せて下さい」って言って、「大丈夫ですし、里親さんに委託をしてください」ということを児童相談所の方に強く言ってるんですけども、まあ絶対不調が出ないということはないので、半分自分でも「大丈夫です、後は任せて下さい」を言いつつ、ちょっとどっかで不安がないわけではないんですけども、自分にも言い聞かせるというようなところで、不調は出さない、後の支援はしっかりし、サポートはしていきますというかたちで、児童相談所の方にも伝えるようにしています。

週末里親の件ですけれども、こちらのほうも実際私たちも施設で仕事をしておりますので、施設の子どもたちを見ていると、ほんとに里親、週末里親にということになってからも、何ケースか養護施設からケースワーカーのほうに伝えて、「何とかありませんか」ということを伝えたくてはありますが、それでケースワーカーの方から実親さんのほうに打診をすると、なかなかうんとは言ってくれないところがあります。ただ施設の子どもにとって、養育里親さんにまだまだ行けない状況にありますので、もしそうであるのであれば、家庭生活を体験するというところで、継続して週末里親に行くということがすごく大事なことなんだろうなというふうに思いますし、実際週末里親さんの家庭訪問をさせていただいて、週末里親さんをなさってるかたの思いを聞いたりしますと、ほんとに毎週も来ないんですね。月に1回。大きくなれば2ヶ月、3ヶ月に1回しか来なくなってる子どもたちの将来のことを、ほんとに一生懸命考えて下さってますし、ぜひこの子が社会に出ても応援していきたいということは思っていますので、その施設の子どもたちにとっても、親とはまた違う大切な場所というものができていくことが必要だろうなというふうに思いますので、この点については専門相談員の方たちと連携しながら、ぜひどうしてもお家に帰れない、養育里親委託もできない子どもたちは、週末里親に委託していくということを進めていきたいなというふう

に思っています。

私たち施設で、この支援機関事業を受けるということは、かなり現場への負担というのがかかってきます。私は専任でさせていただいてますけれども、他の職員は全部兼任ですので、実際家庭訪問であったりとか、事業が大きくなるにつれて地域への負担、施設への負担というのが大きくなっています。じゃあその負担の大きいこの事業を受けるっていうことの中から、実際子どもたちに、施設に今いる子どもたちにどんなメリットがあるんだろうか。そこへなにか還元するものがあるのだろうか。最初にこれは絶対必要と思ったのが週末里親なんですけれども、里親の訪問をする中ではつきり見えたなと思って、1年前に、推進委員会の時に、京都市の場合は、里親家庭体験事業に対する法的なお金は出てなかったもので、実際の事業費の中から、そこから施設が払うことになってましたので、それではなかなか委託もできない。そこをちゃんと予算化してくださいということを伝える中で、これはすごく動きが速かったですけれども、今年度からは家庭体験事業費として、週末里親の費用も出してもらえることになってます。

最初にスーパーバイザーの先生に、先を歩いてらっしゃる機関もいっぱいある中で、まず京都らしい支援の仕方っていうのが考えられたらいいですねっていうことを言われたんです。今2年なんですけれども、まあ実際何が京都らしいのかまだまだ見えてはいないんですけど、まず京都市全体で里親支援、里親委託に取り組める、みんながそんな意識を持ってもらえるというような状況になっていけばいいなというふうに思っています。施設、地域の方、行政、皆さんで支えてやっていくことを目指していきたいなというふうに思っています。

### 望ましい里親支援とは

- 里親さんが里親になって良かったと思える支援
- 丸投げではなくチームでの養育
- 不調を出さない
- 子どもの幸せを第一に
- 寄り添い方の支援

\* 支援機関事業を受託して二年、少しづつ存在を認知して頂けるようになってきたことを実感しています。里親さんを中心に皆で手を携えて、一步一步進んでいきたいと思っています。